



牛馬

服部文庫
117
49
3



牛馬問三

目録

- 藪醫者 一
- 氣清 四
- 友乃字 四
- 罷 五
- 子鳥 五
- うくおん 六
- さげら字 七
- 東武溪系寺此絵 七
- 政考小刀 八
- 尾州七ッ寺 一
- 古今の人名 四
- 貝の字 四
- 雲小子鳥 五
- 百子鳥 六
- 垣鶴鞋 六
- ウニカウル 七
- 竹乃画 八
- 土月八自 九

- 为我及郎子抄 九
- 道灌の方 十二
- 益家卿乃夢 十三
- まどろい 十三
- 甲斐 十四
- 胤栗束 十五
- 義経の改名 十六
- 熊坂 十
- 信玄云の夢 十二
- 聖人小夢抄 十三
- 厄色 十四
- 相方 十四
- 安宅の冥 十五
- 飛弾乃函 十六

目錄終



馬問卷之三 前集

新井白蛾著

或人の曰世俗小賢乃庸下坊方のを數賢者といふ
 和流好也又漢土小見流あり也 言て曰摩訶止
 觀七曰又如野巫唯解一術方救一人獲一脯飯何須
 学神農本草耶と見えんは世を承り事久し論語
 巫醫と作魚のの朱程小巫と醫を二とん此
 洋古今醫統二十卷小見へしり論語の巫醫乃即
 巫醫者の義とん扱れ俗野巫或較とありし来あ
 なりといふ
 ○ 或人の曰菽小者姑のといふ事見經あり 曰是六

尾張の遺跡なるは(系葉上は事と記しともを子出り
 又西園海なるも亦といふ是もを執る古伝の記す
 小坂尾州世教小妻の相り多り阿波の世教及魂
 妻は森といふ亦も土俗多きは中葉と云ふは予
 下は世傳小遊り一國海なる物園山長福教寺
 小坂尾世小七寺と稱する阿波の友魂のりり此
 寺小依て是の來歴由來と事)世長福寺其
 同園中志那下津里の阿波の浦乃西萱津原其
 小坂尾人皇宇五代聖武天皇平三の行基菩薩乃
 明皇少り代二世智光上人の妻の阿波にて光仁帝
 寶龜十子奥州伊治大原世磨及(此事は牛馬
 記畧に載る)賦平治



とともは殘黨を討ちつれは只一河内掎也紀
 是廣勅と奉りて東奥に赴く于時天應元年の
 秋なりとの也世紀是廣といふは河州譽田の人世
 河内平岡城小居世り役工陰てを妻小謂て曰我い
 まこ子好今幸に汝婚り我七年の役満る也
 下又小妻所由來の事容は我毎年信トヤ是とい
 のちて男子を討ち殺す下といふ妻小あつて是廣の
 奥州小下りぬ別まては教月男子を討ち殺すといふ
 母は終り身まらりぬ世子七歳の子乳母なりりさい
 同て曰人皆父母を殺し父母は何もいふ乳母は
 とつる志りくの事と傳りけ見奥州小下りて父

事なりし河内と悲ひ出て尾州とありけり
重國刻々言傳まきりて終小下津里の宮あり
英泉の極楽とありぬ又此是廣上院と七色の位
よりて古寺と改称今片は所小宿に夢の虫と
て何れ世よりかりしり物格も如きやと曰ふ事
白されぬ今日六七歳なりなり男子宮ふりて
逆流と死せりを神とせんりし事ありぬ不
思儀乃事しとの事廣上院の懐中ふりし事
事りの事か記や事と曰守り候と甚所佛の事
と事是廣上の死骸と見んとて彼所と死れぬ
小別述一子なれを面は志しぬと事小女と別

甚所仏と持たれぬ親子の事と知て悲歎慟哭
こも死のありし事扱死骸と長福寺へ葬んとて彼
寺より智光上人の事の子細候親子始ての對面
け今世とて一言言ふかひを世縁とて上人といひな
けきありし事と上人もとりありとて彼死骸と煙
上へ附め醫王密法と被せし事とありし事
版氣とあり忽獲出とて言傳候りて親子は事
と終り又りとの死骸とありぬ事地と今小傳へて及魂
者の事といひ浦と名はけて事との備といひ
後人皇五十八代光孝帝仁和三十年七月大地震の時
發して陸とありし事浦の名も今阿岐子の

教のいふ扱是廣河内(改)の坂寺院堂塔とく
を造営するなり土佐の七裁寺といひるを後には
寺といふ月性寺去て入皇辛八代二條帝の比は
同は清洲の寺城移り財に大伴臣朝臣女長勅を
奉じて尾張守小任は海部郡務城に居て安
長小女五仁安二子月九日七載ありて死に安
長も又けり一紀是廣河内を遊して一切経書寫
し廿七寺(寄附せ)るを心徳書成集て是を
寫すに之を念院安元元年に始て治承二年小終
る所の經今小終に手是成る方小終に筆あり
經卷をといひるを感懐る今の寺は清洲あり

秘二のりたなり

○平治別小遊り一考にきく曰く是るの考は
名取をともいひるなり信の考も人をして余が信の易と考
りんとしむるなりかしてあるは滞りて教てるなり
ては名取は信の考も尾張の考もなりは別遊
ありたり十日信りも信易考なりあり十日信送りぬ世
後にも入て一考の曰く七考場系清はぬ七考の考を
しりたり一考系清熱田の考も考と之考も考
はしりの考なりしりぬはははははははははははは
衛は官し七考と系考なりと考も考し
○いふは八考人自考するは清門た清門は清等考も

野々事なり流々兵の字は武治の意なり頼朝
 頼朝兵衛佐と云ふ頼政を兵庫次と云ふ類ひなり
 尉の字は衛尉の官名ありて六位六位の人ありて
 此の用ゆりしを義經と檢非違使五位尉と云ふ
 類ひ是なり乱世にほと惟と好く右衛門左衛門と云
 之れ平人の毎稱と云ふぬ是又古今の風俗と云ふ
 ○又は泉乃古字のありての漢乃字なり故に今に
 て令銀と目の事と通用は初字世義と云ふは俗
 字偽字といふ事強と好く
 ○貝の字は俗に子安貝の事なり象形の名なり
 古者凡令銀乃寶なりは貝と云ふ交易と通は後

世小乃の令銀を用ては貝の事と云ふは云ふれども
 文字法制するも古に云ふては財寶等の文字
 皆貝の字に從ひ造り凡貝に從ひては寶乃
 義より造り
 ○四條の字は黜也体なり也と註して今和俗の字は
 用ひ意と的當せ居る故といふはなるれども私出と
 云ふ字義小なるは然とも世ありては記なり
 易や万葉集に
 百敷乃大なる人なりなりなり
 遊ししは月をえりなり
 ○或人の曰世俗は鹿乃鳥といふ事はさるる組合

たりては、其の如く、
 死 予の自を殺して一理を以て、
 也と云は、大なり。竊の事、
 集貝^{アソニルカタチ}とて和例の事、
 中へ通は、
 今、
 事し、
 類ひ、
 ○日本、
 為て、

○或人の曰、百子名は何とや。曰、鳥、
 送、
 乃、
 形、
 是、
 ○日本、
 刑、

○或人の曰、
 と、

の中らそつひとせそ本居松幸と次と翌晩み起
 言とらるの時何のやん塩糖とボウダラといを
 尋ふ所彼也言ふは莫くは世の事を販入てある
 酒と碎と共と人吃て加うごうといさるごとて
 勘やじ又糖の莫糖部一ものまをさうは莫糖
 中み世の事を入てる酒とてといたり糖とて此
 莫の危とせりと言ふは義あるも亦や 平の白告
 附合乃安言かり定塩糖と加うごう酒の碎と加う
 らといふ事は其の方言ありて日本の通傳あるは
 又酒の碎或大坂のハメシといひは入てはナリヨ上
 といふ方報ひし事今足下の同ふかやありて其

の取本の切端杭をこれとくれば糖とくれば
 平なり是とせらるも亦は其糖の西も和州あるは
 さやうなり字より後手ありは和州集傳ふ曰は莫の
 肉中み糖のともなり筋とて身とるればとてゆふ
 肉裂乃と下略なりと見えり

○ 取人の曰糖糖は二字減サケと削と糖は和字也
 漢名あり 曰糖若水先生の考は国書乃と糖
 莫とサケとに東醫寶鑑乃本とタラとに大
 には莫大巨莫あり書し本乃字音義あるは是
 温商たりや唐の考は考

○ 取人の曰ウニヨウルの文字は一角の字ありや

曰ウニヨウルは蜜漬みれんを文子好し且ウニヨ
 ウルとは角といふ事あて牛の角も廉乃角之皆
 うふかりふし今世とあて價貴くゆれんを
 扱はあれ方あてエニホウルといふ事のこたひよふ
 うまかりねとは角の熟るをさるべし
 ○或人の曰東武浅草寺觀音ふ右記法馬を土佐
 小田此画を右屋眼元信乃そまうてひりて
 て筆法合ふて人繩と書原てよりあり筆なりや
 いふに理も也 曰事と世のそま書て書信の
 書我といふ者上四ふれんを武う白元信はあ
 此をを教は右屋眼よりと書あのおうみえゆれん

扱系初淺水も右屋眼元信の法もあてふま
 聖人出て筆法合けりといひと書水鴨矢の耐
 を法もも機といふに法は附會をりるん法も
 又りあつても揚子舞が書りる歌嘶て水茶と求
 く急る由はるを長く書法もぬをる下りてふ
 書も下り子舞の法を画といふ名書記ふ
 一少和漢同日の法也
 ○将聖尚信といふは氏の名画なり子思尚信養朴
 名子の耐竹乃法と聖古法法書教すむふりて
 下も皆尚信の心よりけり信も情つてて法と
 一飛了る月と腰好くさるるあ法行の歌際す

うけりてあつたのつうなる凡情をけしむるに候ひ
せむこと宜敷くは第力をゆるしり登月父尚信と見
せらるる高信大と貴史一は同かしのとくはしる
是れを車との下へあねとて行書乃行たわら
葉これ陰取るれん取の竹あふ期くは結るを
のぞくとしり流し神ふふとのぞ

○今村氏の白政考入道は刀もよみあてはす小刀乃
急合か敷耐政所は小刀を以て正宗の刀は総て別
をいふとけつれはか敷は事な正宗は後方正宗は曰
小刀は別を以て業とす刀は切を以て能くは業とす
りなられ試すを地味は候とて別政考の小刀十廿

いふ少紙端を以て振り合せ日他の刀を以て馬
より切し候とて候り候と切られん人感せざる
そのなりといふ事なる也 曰兼有片とては名
地位上まで候もありぬとて中も先を以て政考は
刀の目利乃傳とて其地は正統とあしし正統は
生籾乃上とて中籾の油目法と小刀のりといふ
出りものとす

○熊治之月八日物新と祭事はむらう三葉小籾
宗近初と造りといふり山の地とておびやふ最
すくきりしはけ地味取乃神恩を謝すはは神
と祭所は物新山(物新山)を遺風なり保況

のこし概乃合延して刀城送るよりそへて此等の
出言し

○事の曰る我を即討殺と相責ふに即義亮と奉
抄引り奉り旧記實錄より云 曰今忠國画(筆)
人(字)會(字)是(字)勇(字)我(字)把(字)保(字)乃(字)信(字)化(字)免(字)言(字)し(字)是(字)は
東鑑(一)及(一)乃(一)是(一)利(一)義(一)氏(一)武(一)田(一)五(一)郎(一)の(一)事(一)と(一)傳(一)り(一)混
す(一)の(一)の(一)し(一) 実(一)綱(一)の(一)治(一)世(一)建(一)康(一)之(一)の(一)妻(一)泉(一)小(一)次(一)郎(一)親
平(一)謀(一)及(一)と(一)企(一)附(一)之(一)義(一)盛(一)之(一)長(一)義(一)直(一)義(一)重(一)每(一)甥(一)の(一)在(一)柄
平(一)を(一)流(一)長(一)木(一)を(一)同(一)心(一)し(一)り(一)と(一)傳(一)り(一)て(一)五(一)捕(一)ら(一)り(一)義(一)盛(一)曰
功(一)と(一)以(一)て(一)子(一)是(一)二(一)人(一)と(一)ゆ(一)り(一)し(一)ゆ(一)り(一)流(一)長(一)は(一)叔(一)父
たり(一)和(一)田(一)一(一)門(一)並(一)長(一)目(一)方(一)と(一)り(一)て(一)總(一)て(一)引(一)き(一)て(一)飛

小處せらり義盛の遂に既よ世討破れりとも在
柄う原浦とて清地りとも思ひ居る方亦形々彼
地城義時と流りゆりゆり義盛大小憤り一族族相
具一建康之季云月百(此年十二月建保) 実綱の所
と切初に中みも相責ふは比類を記勇力小義亮
小日向の一人も死とありたりと云ふ是利之郎義
氏政所のお裁許橋の意ありは義氏叶ひて
逃れんと相責ふ追ひけ程の神と九事と云ふ義
氏駿る小敵とありて院の西(飛)しと云ふは建保
中より絶て義氏向へ(飛)越不朝夷宗は叔父の義小
馬被るれ候て飛事と不為橋(也)り義氏城進ん

後日宿とのりの陽支の不用て義氏適る事なる
て奇乞と愛工又武田信光某町の口ありて出合
既工新の如信光の子小悪之節信忠父の命不替ん
と去申不地隔る方好美奈其孝心と感死とゆり
して馳よぬ如け流るなりなり今昔我相落の修能
たり事なり

○或人の曰徳坂の事義經記大全片義經奥州下
の耐後之宿小て取盗入義經不討行^{ヌヒト} 盗の極深
友沢入ると由利を命とりり^{スガタ}のし今世に國重不
傳り片は西人在一人工志る宿なりと入るり又
義經勲功記片は徳坂長樂と云其心の長長樂^{ハシクイ}

勇種^{ユウモウ}と云くとも片長樂と名乗ると今に樂城
范と書るりもその所也是とす^{ワタナ} 曰徳坂と
りり^{カキヨ}の事も傳記を修工せし叔義經記に拙りて
且名^{カキヨ}後多^{タニ}一是と実^{ビツ}録^{ロク}一列^{リツ}かく又大全後宿
といふ事^{キウ}なるなり一^{キウ}平義濃^{ヘイギノ}流^{リウ}下^カり不^フ後^コ宿^{シュク}に
さ^{キウ}らふ事^{セキ}由^ユ利^リなり^キし^キ後^コ長^{チヤウ}樂^{ラク}の^ノわ^ハと^シ後
山^{サン}といひ^イ不^フ後^コ宿^{シュク}の^ノ宿^{シュク}なり^キ下^カり^キ十^{ジュウ}四^シ里^リと^シ云^ク其
濃^ノと^シ近^{チカ}の^ノ國^{クニ}城^{シロ}廢^ヘ地^チ後^コの^ノ里^リ試^シ新^{シン}て^テ山^{サン}中^{チュウ}の^ノ里^リと^シ云^ク
而^{シテ}其^ノ營^{エイ}盤^{パン}津^ツ前^{マエ}の^ノ古^コ墳^{フン}なり^キし^キ工^ク玉^{タマ}血^{ケツ}が^ケ稿^{コウ}と^シ稿^{コウ}
た^テ工^ク首^ウて^テ在^シ陳^{チン}厨^{チュ}さ^シは^ハる^ル是^レじ^キり^キ義^ギ經^{キョウ}徳^{トク}坂^{ハカ}試^シ討^{トウ}
と^シ云^クといひ^イ土^{ツチ}人^{ジン}白^{ハク}義^ギ經^{キョウ}盜^{トウ}等^{トウ}と^シ切^キて^テ送^{ソウ}也^ヤ不^フ海^{カイ}天^{テン}の

池水血に染て流す力が上玉血川玉血う橋の志
多池の平今と好むとくし野と山中はううの平
宿多りし今見れ僅一草の康乃まわつた
のこ又熊坂の道一赤坂の布と作やも相遠し
をれも下を赤坂の驛一宿一熊坂う事と古老
不向一上世宿の中比又熊坂う回電と傳ふあわ
又柳見の松と釜舟川の中仙道のうしあて書墓
は本多路ししは世世数十里不徒来して人試悩
しりし又今も書野ぐ原とくし示われも書
尾張多まて七千里不隔くし人是又名う因て突
破失し事ま

○東人の曰一樂祓が武者物語なる因道權入名隅
田川の和方又子長へ多向の亦又最部の一首木乃
況と見れを由とふ道權は文武の達人と稱せし
日持資は王佐の才小近しと和信者も稱歎を
す叔最期のかたけ附さしり命の惜められ況は
信後好し一樂祓乃慕京集と見さるは信後好
姓集は道權の孫系少くは方と康正元とお洲の
友次陣の討敵討死の武者へ多向の亦ありそ始末
被集し信好し叔道權は文明十八年討死され
康正元年とあり二十二年に北尾景親と湯是稱世小あり
さ事ゆし凡信後去と記せば類ひ多し

信長此の言無親王乃杖門小入あり一討の報あり
くちろくの座小落ぬれぬの和奇と詠して送る
短ひと延喜帝地獄小落ぬれぬ乃御製なり云
世等此を能明白小見入るれも兎幸の乃も信
長之安と開く

○信長云安土に於て正月二日乃我の妻小土の氣
來て本の子此後と喰破りり其甚馬忽死けり
見あり一の世毎日向き乃る小他處あり一信長
は今迄字九あり甲午の年光孝に成子小生れ
今茲又平めし誠之忍妻とゆはせり

○しり一忍家御のゆめ小逢坂代園と云あり

園物ごとく且白あなりと見て喜こめぬ言は終
諸力たる妙きものなれぬ凶事なりと有りゆめ
利者として考るをあり一是れ右幸なれ難乃
半強ゆありといふ果て牛と送りとのありを
世ゆめと大江匡衡小同終す一逢坂代園し喜
白し喜の除目よりぬる園白小成あり一と
果てて明乃春と園白小成終す

○或人の曰後を能人上喜好といふ何の書なり
ありや 曰文中子小至人上喜なり一と云
といひ能人といふ實を名を果するは 或人又
曰大凡喜はぬなりのもや 曰能言此動

かつ又風寒暑濕由一因て凡の事多しを以難
 病指南といふ小冊子の巻尾に載る所亦大に小
 意あり又多し鬼と史記の類に皆病なり又周礼
 占夢の官ありて夢を考ふの及ぶありとも今
 一たりし正夢瑞夢といふ事は一生のうちに
 一或るや或るの事なり百人中百人皆雜夢といふ
 の事ありし河上公の凶吉を占ふ事に入
 ずと叔梁紇子の書毛渾水とありて
 一病一瘵一瘵也真後一先て信を以て之次
 ○或人の曰咒のりめゆ 曰まじらひと云言山
 伏醫ありとも上代たりとも又神道にも之神代巻小

大已貴命ムチノミコト少彥名命スクナヒコと力を戦せ然一ありて鳥
 けの昆虫乃灾異と撰人なり則を禁厭の法或
 定と云い此書も久しきりるれも是又山道乃
 一端の

○或人の曰厄はれ事ゆゆ 曰いりふに於て定後
 折ユケクハ菜花エナクハ拍落し四十斤死の刑に通るる事
 也病の後古由兒女子の歌れありて大丈夫乃知と
 する事ありあはれ靈樞經レイスウキョウに方説ありて家ありて
 ○或人の曰甲斐なりといふは後立は於て凡の事
 なる也 曰是和俗の言葉也 竹とり物ありふ
 有ス巢カイ貝カイとりといふ乃事ありて勞ラクしん益エキる也

さうなり甲斐の甲斐くさのりさうな
茶は是より許しつゝのし

○いふことの手も亦終り浦井何某とて方町
人と又減醫小何と申んりとのと墨池之位々
と三人さうと花鳥風月乃友形やうあ府海井
よと醫者たうと一龍英と送りくうはけは醫又
墨池殿へともせり墨池殿とも見たりから龍英
まはると又海井の方へあつた海井は我りとも
送り莫る能は能も是もさうも彼減醫を扱
柔らふらさしとさのせう方程と料理たるを
墨池殿へ送りあつたといふ醫も墨池何と

て知事さうといふたの由誠味て笑ひ々々世々二
位殿同様の浦井小見せよとて

けりておめがらう一英試れの池へ

んままはりてれ浦井へなり

○氣樂新お境といひる泉別樓の精作也
精に於此出の名人おてさう考云の心ゆはあふ
あ府海井を乞出さうと品今不思儀なる事とんか
海門おて故風が去来風と吟言と中又例のたう
とく好りと所笑ひるふけ事さうく傳りあるは
んあく余人を法らこれ英吾と聞て左風とさふ
あて人なりて見せりゆ話を新賣り去来風法

冷たき病ありては是附の一息をたかたけせよと
也孫の病ありては難治と不吉の兆かりて國君の身と
命をたかたけし人の命をたかたけし

○信後小左衛門尉を以て面縁のこころを對考す余
四角十の我教様を以て方也對て曰是は様を以て
様面の面縁の形を以て方とは信後をわたり小左
則天武后の幸せしむるは法易之法昌宗との
のこころ揚再思といふ方の使て曰人皆昌宗の面
は蓮花を以てりて中我おしむる蓮花昌宗に
似たりといふ方同の様も是よりありたり又義經
奥州下りの附安宅の園にて舟を義經と打つる

○安宅園とのすす強をこの作意小て突たる
なりし叔晋の成都王名亮といふ方の反附小
晋帝姓害強を以て京強潛幸して河陽乃
河陽の東方津吏是と然て河陽のこころは附
宗典といふ信下附より來ては孫を見別教と
揚て帝を打て曰津の長吏は非考の奇と止め
禁す方の役なり故今とめらるる急乃強強始
貴人といふ方奴れといふ津吏もゆかりと通
しけりといふ舟を義經打つるは是より
作つる也此の歌甚く多し

○源九郎義經都を用さる海もなま任は義經

山小東傳信を於て逃れ隠すの時義經
 と改て義経と号せり強念あり尋りし事
 散たわるといふ切方とあるは時之入吏屬令
 て曰義行の至訓能切し能かりの義し於
 今小志のを同音と傳ふべしや至後強念あり
 義顯と号せり乃義経義行義顯一人の義し
 ○世信小飛彈の函といふ一人の名乃飛小なり飛
 たり日中事述考小飛彈の函は若世別良函と號
 たり飛彈の函と號とあり一は京田舎小飛
 飛彈の函は若世別良函と號とあり一は京田舎小飛
 又を先くと傳ふたのとき本記より取最の傳

新しきものなり本もろかりて別立て極を
 表出来終と又を次へ切替日本新して本のかれ
 たり時小飛方て極の知は二三の事もかりたり
 又櫻喜が小しかりて方と信より中も費究を内と
 ぬらりなり貫とありぬらり割里本とありと
 とくそときひしぎて若世の初一本小して作
 付たりとく信代をとも透同好く変更し今時の
 大工の果や小するは格別の細工なりたひあり
 京へと云彼小空ありとありひく小下りて作
 止りぬらり固く小飛彈の函の遺作の神社仏閣
 乃多きとては初し先へ入る名ありはこれなり

何と云ん程と云書し飛弾の西に一人の名を
 入度せしむる末歴と云て書し方ふおれを
 其後愚業と云ふと飛弾は良函の多記を
 其らちあり一人ぬらば美小の初なり
 牛馬問之終

牛馬問之終

